

## 長城学院

東京都文京区本郷 6-26-1-2F トーカンキャステール本郷  
URL : <http://www.chojogakuin.com>

「共通点の多い中国語と日本語。  
違うのはわずか30%なんです」

学院長  
**張 佶**



■日本人が中国語を習おうとする時、途中で多くの人が挫折するという。中国で生まれ育ち、独学で日本語を学んだという張学院長は「教え方に問題がある」と考え、独自のテキストを作成。「漢字中国語」という全く新しい中国語教育法を実践すべく『長城学院』を立ち上げた。本日は女優の島田陽子さんが訪問。学院長にインタビューを行った。

独学で日本語を勉強し  
日本で起業を果たす

島田 張学院長の歩みから伺います。  
張 中国の北京で生まれ育ち、学業修了後は製鉄所に就職して工場に勤務していました。そして1973年、当時日本の総

理大臣だった田中角栄さんが中国を訪問された時に、これからは日本語が役に立つだろうと思い、独学で日本語の勉強をはじめたんです。その後、『北京師範大学』の外国語学部を経て、北京市人民政府の地方公務員になりました。

島田 そこからはどのようなお仕事をさ

れていたのでしょうか。  
張 同時通訳など、主に語学力を活かした仕事に携わりました。そこから政府の派遣で日本に来て、通商産業省（現経済産業省）の管轄にあった日本生産性本部の経営コンサルタントの養成講座で1年間勉強をしてから、一旦中国に戻ったのです。中国では経営コンサルタントとして3年間、国営企業の赤字問題に取り組みました。1987年、34歳の時には『埼玉大学』に留学し、来日から1カ月ほどで『長城コンサルティング』という会社を立ち上げました。

島田 留学生で起業されるのはすごいことですね。

張 けれども、ほどなくして天安門事件が起こりましてね。日本と中国間のコンサルティングを手掛けていたので、仕事のキャンセルが相次いで生活ができなくなってしまったんですよ。そこからITの仕事に携わったものの、今度はリーマン・ショックで景気はどん底に。当時はもう『埼玉大学』を経て『成城大学』の大学院も卒業していたので、ワーキングビザを取得するため、中国語を教える学校で仕事をすることになったのです。ほんの半年ほどでしたが、その経験が自分にとっては大きな転機になりました。

日本人にふさわしい  
中国語の学習法を研究

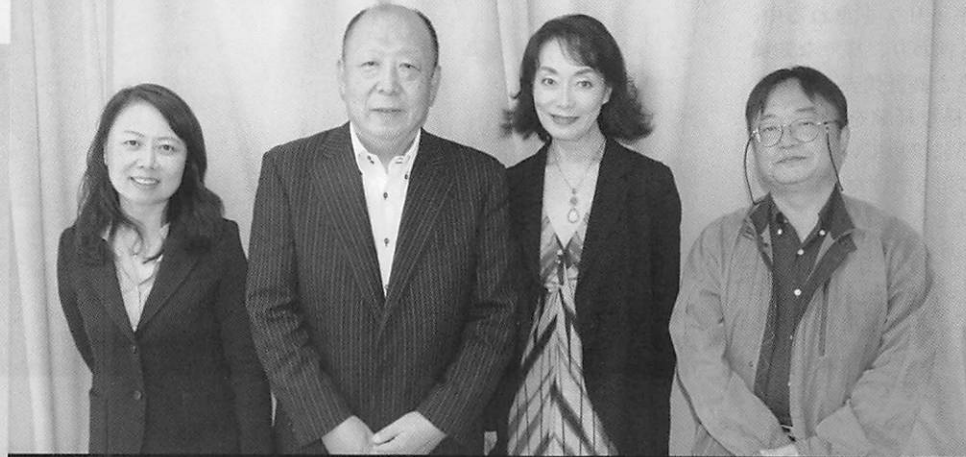
島田 中国語を教える学校で、学院長は

### 日本人が分からないところを 徹底的に分析して指導にあたる

COLUMN

▼「言葉は人に教えられるものではなく、自分で学ぶもの」という張学院長。自身も誰の指導も受けずに独学で日本語を学んできただけに、説得力のある言葉だ。「教えられている間は、自分のものにはなりません。中国語を教える人の多くが『教えてやっている』という考え方ですが、私は違う。自分と相手は対等であり、『相手が分からないところだけ、分かってもらえるようにする』というスタンスなんです」と学院長。これまで日本語を勉強し、テキストを制作する中で、日本語と中国語の違いを分析してきた。教えるのはその「違い」の部分だけ。それが『長城学院』の指導法だ。普通の教室の場合、生徒から先生へ質問することもあるが、「質問は私の教えることと、相手の理解に差が生じた時に発生するもの。限られた時間の中で質問をしたり答えたりする時間も惜しいので、日本人が分からないことを徹底的に研究し、分からないことだけを教えるようにしている」。ほとんど質問が出ないのは、誰もが理解している証拠なのだ。

# 漢字から学ぶ「漢字中国語」を駆使して、 短期間で中国語をマスターできる環境を構築



副院長の矢部彰瑛さんも交え、ゲストインタビュアーの島田陽子さんと共に記念撮影

講師をされていたのでしょうか。

張 そうです。日本人に中国語を教えていましたが、教える側も学ぶ側も、どちらも一生懸命なのになかなか身に付かないんですよ。その時に思ったのが、教え方に問題があるということ。日本人に早く中国語を覚えてもらいたいという思いで、そこからオリジナルテキストの制作をはじめたんです。テキストは何度も何度も修正を重ねて、完成までに5～6年を費やしましたね。

島田 そのテキストを活用するため、こちらの学校を立ち上げられたと。

張 はい。コンサルティング会社の株主の会社との共同出資ということで、2011年にこの「長城学院」を創立しました。現在は日本に2校、中国に2校を展開する他、日本と中国での企業研修もお受けしています。

島田 学院長が考案された教育方法は、どのような特徴がありますか。

張 「漢字中国語」といって、発音からではなく、漢字から学ぶ新しい学習法です。中国語の教室のほとんどが、「ピンイン」というアルファベットを使った発音の記号を教えるところからはじまるんですね。日本人にはなじみのないものですし、その時点で多くの方が挫折してしまうんですよ。けれども、漢字なら日本人が得意とするところでしょう。

島田 ええ。理解しやすいところから入れば、途中で挫折もしなくなるということですね。

張 そうです。日本語と中国語は、共通する部分が70%、異なる部分が30%と言われていています。ですから、本来ならば異なる30%を教えるだけで理解することができるんですよ。これは漢字を使う日本人だからこその特権。欧米人にはこの方法は使えません。

島田 そう考えれば、難しそうだった中国語がとても身近に感じますね。こちらの指導方法だと、生徒さんも途中で挫折されず、習得も早いのでしょうか。

張 そうですね。たとえば週に2回、1回1時間の授業を3カ月続ければ、中国語の検定の中級ぐらいのレベルに達します。授業時間はトータルで24時間。丸1日分だけで成果が得られる計算です。

島田 それはすごいですね！なじみのない発音記号からではなく、なじみのある漢字からスタートする方法はこちら独自のものなのでしょう。

張 はい。もちろん発音記号も必要なことですが、先に漢字から入れば、知らないうちに発音記号も分かるようになっていくんですよ。覚える順番を変えたことで、早く、スムーズに自分のものにしていけるんです。発音方法にしても、舌の位置などを細かに説明するのではなく、聞いて真似てを繰り返せば、自然と正しい発音が身に付いています。

島田 なんだか中国語を学んでみたくなりますね。では最後にこれからの夢を。

張 この指導方法には自信がありますが、まだまだ学生が少ないのが現状です。今後はより多くの人に知っていただき、「中国語を習うならここ」と言われるような、中国語学習のスタンダード的存在になりたいですね。

(2016年10月取材)

## COMMENT

GUEST

「私も映画の撮影で中国語のセリフを経験しましたが、発音が難しかったですね。でも張学院長のお話を聞いているうちに、中国語に対するイメージが大きく変わりました。理屈で考えるのではなく、日本人として培ってきた漢字の知識をベースにすれば早く習得できるということも納得ですね」

